

春燈



万太郎の句

持ち古りし夫婦の箸や冷奴

句集『草の丈』昭和二十七年

僅か十七音の表現で一編の短篇小説にも引けを取らぬ世界を詠出しております。流石に市井諷詠の劇作家ならではの作と感嘆させられます。一読、中年の夫婦の平穏な暮しの有り様が目に浮かびますが、眼目は「持ち古りし夫婦の箸」です。この箸が所帯を持つてからの、夫婦生活の生き証人です。配するに「冷奴」。心憎い季語です。一陣の涼風が胸中を吹き抜けてゆきます。

橋爪 隆

万太郎の句

親一人子一人蛍光りけり

句集『これやこの』昭和二十一年

前書に耕一応召とある。一人つ子を出征させる親の無念さ、切なさが滲み出ている。然もこの句はそういう時代背景を超越して、普遍的な親子の情愛がこちらに響いてくる処が凄い。深い信頼で結ばれた親子に余計な言葉はいらない。師にとつて季語の〈蛍光りけり〉は未来を照らす明かりだったのかも知れない。しかし御子息は十三年後、三十七歳の若さでこの世を去ってしまった。

綱 徳 女

主宰の句



鈴木榮子

盆三日父母祖母を止めたし

大緑陰異国の赤子小さし小さし

汗手貫京の九条に擦れ違ふ

敦忌の黒き日傘を墓に置き

父の日の注文多き料理店



墓 無 言

乗 鞍 三 彦

竹皮を脱げり迷ひの失せにけり
葎切や葎の侵しし休耕田
からうじて残る古道やかたつぶり
梅雨深く肩を寄せあふ塚大小
滴りや片頬欠けし磨崖仏
蟻の列天守に異変ありしかな
尺蠖虫沖を眺めて折り返す
尺蠖虫野良着の寸を取りゐたり
結局は降り出しにけり墓無言
たわい無くくづる嘘やさくらんぼ

朱 夏

松尾 濤子

シーサーの口中まつ赤日の盛り
戦禍あととなりし丈余のさたうきび
拜所うかんじゆに火の跡あまた黒揚羽
摩文仁かな塩濃き汗の噴きやまず
ガジュマルの緑陰に息ととのふる
水牛の総身むさき大旱
沖繩をうぶすなとして燕の子
暑き夜の膳に膾の豚の耳
炎帝にかしづく外はなき暮らし
暁の月満つパイヤ畑かな

当月集

鈴木 榮子選



○ 長谷川 歌子

青嵐すは鎌倉の古道かな

陶枕に亡父のかげや拭かでおく

天神の茅の輪くぐりの下駄の音

河童棲む深淵に子の泳ぎけり

無頼派の昭和遠のく桜桃忌

○ 横田 初美

波崎町は太刀の切つ先夏燕

はまなすの沖より雨の上りけり

海見えてきて老鶯とわかれけり

明日へと長くる砂防の松の芯

錨絡めしままの漁網や沖縄忌

○ 荻野 嘉代子

虹立てり竜頭鷯首の誘うて(毛越寺)

四万六千日駄菓子にお札貼られけり

広重図麦湯売る娘のにほやかな

日なか来て伏目涼しや伎芸天

伎楽面の謎解く旅や雲の峰(悼・万之丞)

○ 佐渡谷 秀一

大使館通りの炎暑摂氏華氏

木立より噴水の音松本楼

金魚玉あとがきから読む句集かな

盗掘をのがれて涼し武官俑

嫁早つづく里村竹の花

○ 宮崎裕子

丹田の力抜けたる暑さかな
封印の回転扉巨大蜘蛛

さくらんぼ兄になる児のまめまめし

飛魚のくさやの艶も式根島

ハワイアンシヨップに真夏弾けたり

○ 森下賢一

夕焼けて外にはみ出し立ち飲みす

海ほぼづきの口許だけを思ひ出す

舟を追ふ子連れの鷗冲膾

鷗来て窓辺飛ぶ宿明け易し

柔肌と異なる湿り蛇の衣

○ 小泉三枝

真四角に笑顔の詰まるさくらんぼ

六本木ヒルズ軽鼻の子SP付育ち

空中庭園風の運びしねぢり花

独り居を思ひ知つたる昼寝覚

うつぼ草熊野古道に雨気吐けり

○ 武田巨子

青簾大きく吊りて貴船かな

夕焼の鴟尾に残れり鑑真忌

通り庭父待つ水を打ちにけり

葭障子重ねても見ゆ妣の顔

戻りきし青水無月の蓮如みち

○ 村上勝正

母のこと偲ばるる枇杷食みにけり

さくらんぼ粒を揃へて届きけり

泰山木の花匂ふ夜や太宰の忌

すつきりと笠雲取れし夏の富士

子が来ればカレーライスや夕薄暑

○ 田嶋洋子

人厭ひ人恋ひにけり蝸牛

原色のバスの広告街暑し

ローランサンの俯く少女巴里祭

真つ直ぐな愛に育ちしソーダ水

祭笛届きて人の許せけり

春燈の句

鈴木 榮子選



辰雄忌や三河の空に風の声

神奈川 今川千鶴子

月の物はじまりし子の海酸漿

兵庫 川端 正紀

竹島に茅の輪くぐりし旅の瑞みづらぎ

汗が目に入りし洛中洛外図

麦秋や胸の高さにひろがる香

水鶏叩く闇夜にひびの入るごとく

弘法山むらさきに暮れ桐の花（子安大師像）

天牛の身に散らひもなく躰跳ぶ

水馬雲蹴つて水動かざる

神奈川 荒井 慈

一瞬のためらひもなく躰跳ぶ

水遊びの声を背に家事捗れり

竜が翔け鳳凰が舞ふ大夕焼

辣蕪漬の骨法夫の会得せし

米櫃に積る月日よ梅雨深し

岡山 中桐 葉子

斑猫に未必の故意の迷路かな

人の訃に蛙は声をしぼりけり

夢もまた掌編に似て明易し

萍や片づけ切れぬ身のほとり

シロフオンのころがる音色さくらんぼ

蝮酒一杯飲めと言はれても

真砂女語る先生の目の涼しかり

梅雨明けて綺麗な風に吹かれけり

静岡 岡 杉山 誠市

時計草脛おもたき昼下り

雷に追はれて入る縄のれん

優曇華を信じて人を信じざる

宮崎 宮地れい子

子育ては褒めて育てよ青芒

ラムネのむ上下にうごく喉仏

夏痩せて老兵はみる露宮の夢

余言

鈴木 榮子

父もかくさびしかりしか父の日に

吉田かずや

さびしいーと言っているが特にさびしいほどでもない。い
うなれば父の日なんていったって、こんなものかと思ってい
るのではないだろうか。学校も勤めも好きな仕事もそれなり
にやり遂げたし、家族にも特に不満はない。よい人生だった。
ぐれでも男は、かの安住敦先生ですら

妻がゐて子がゐて孤独いわし雲

敦

と詠まれて男性の共感を買っている。NHKのアナウンサー

のどなただったか、一句といえばこの句だと言っておられた。
作者も父の日を迎えてみると、ふとわが父上を思い、父もい
まの自分のようだったかと思われたのであろう。

昔は父の日、母の日もそう大さわぎされなかった。言つて
みれば商業作戦と親と子のプレセント日にしか思えないこと
もない。淋しいという感情はなかなか難かしいもので、淋し
い日とは神様が生物のためにうっかり作ってしまった齟齬日
かも知れない。然しその日も大事である。

噴水に水の芯なるものありし

西岡 啓子

何ごとにも中をつら抜く芯はあるが、噴水は一つの楽章の
ように立上り、低く舞い色々なアレンジメントを見せてくれ
る。日本は滝が見事なので噴水は外国に比べると、水の量
デザイン、そこに配する造形物が少し淋しいように思う。
噴水を見ていると宝塚のレビューのラインダンスの様に
思ったり真中の高く登りつめる噴水は男役だと思ったりす
る。